

カナダ鉱業アーカイビングの現在

ブリタニア鉱山ミュージアムを事例に

笠原良太

はじめに

本稿では、2016年3月におこなったブリタニア鉱山ミュージアム(Britannia Mine Museum)巡検の内容を記録する。この巡検は、嶋崎尚子教授(早稲田大学文学学術院)、島西智輝准教授(東洋大学経済学部)主導のもと開催されたカナダ鉱山地域巡検の1プログラムであり(現地時間、3月13日)、早稲田大学大学院社会学院生研究会のメンバーである清水拓ならびに笠原良太(ともに早稲田大学大学院文学研究科)が同行した。巡検の拠点としていたバンクーバーから、車でおよそ1時間。大雨の降る中、Andre Xavier氏(Program Manager, Norman B. Keevil, Institute of Mining Engineering, University of British Columbia)の運転・案内のもと、大変充実した巡検を行うことができた。以下にその巡検内容と展示資料を紹介し、鉱山博物館におけるアーカイビングの意義について述べる。

1. ブリタニア鉱山とブリタニア鉱山ミュージアムの概要

(1) ブリタニア鉱山(The Britannia Mine)¹

ブリタニア鉱山は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州(バンクーバーから北におよそ50km)にあった鉱山で、1904年から1974年まで操業していた(図1)。主に産出される鉱石は銅であるが、そのほか、亜鉛、鉛、カドミウム、金、銀も産出した。産出のピークは、1920年代後半から1930年代前半であり、1日当たり7,000トンの鉱石を産出していた。とりわけ銅の産出量は、当時の大英帝国において最大の産出量を誇っていた。

鉱山で働いていた労働者たちのほとんどは、カナダ人とヨーロッパ人であったが、日本をはじめとする“Oriental”(東洋人)やアメリカ人など、およそ50か国からの移民で構成されていた²。それらの労

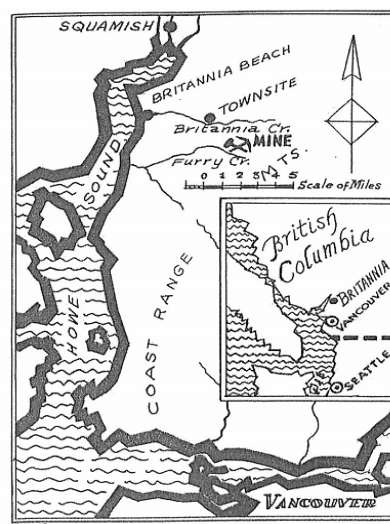


図1 ブリタニア鉱山地図

(Bruce Ramsey [1964] 2014: VIより転載)

¹ 以下、Britannia Mine Museum (2016a; 2016b)を参照。

² 1948年時点で、カナダ人48%、ヨーロッパ人47%、東洋人2%、アメリカ人1%とな

働者とその家族を合わせた約 60,000 人は、主に山元に形成された 2 つの鉱山町、ブリタニア・ビーチ (Britannia Beach : 港近くの加工場ならびに船積場の町、写真 1) とマウント・シアー (Mount Sheer : 渓谷にあった坑口付近の町、写真 2) に居住した。近郊の大都市バンクーバーへの交通手段は海路 (蒸気船) のみで、移動に多大な時間を要した、「孤立した町」であった。しかし、それぞれの町には、学校や小売店、病院など生活に欠かせない諸施設が揃い、ここで働く人たち (看護師や料理人、商人、教師など) は、すべて鉱山会社に雇用されていた。まさに「完結した町」を形成していた。鉱山町ならではの文化や行事もみられ、居住者間の強いコミュニティ意識がみられた。



写真 1 ブリタニア・ビーチ

(Britannia Mine Museum 2016c より転載)



写真 2 マウント・シアー

(Britannia Mine Museum 2016c より転載)

その後、1950 年代の高速道路の建設ならびに銅・亜鉛不況による鉱山の一時的閉山 (1958 年) によって、マウント・シアーは解体した。そして、1960 年代には経営者の交替 (1963 年) と労働組合によるストライキ (1964 年) が起き、1974 年の銅価格の急落と操業コストの高騰によって、ブリタニア鉱山は同年 11 月に閉山した。

(2) ブリタニア鉱山ミュージアム (Britannia Mine Museum)

ブリタニア鉱山ミュージアムは、1975 年にブリタニア・ビーチに設立された、非営利団体運営の博物館である。1985 年には第 3 選鉱場 (Mill No.3、写真 3 参照) が国定史跡に指定され、ブリティッシュ・コロンビアのランドマークとなった³。2010 年には 1,470 万ドルをかけて再開発を行い、「ブリタニア A to Z 展示」等、新たなコーナーを創設して現在の博物館運営を確立した (Mining Association of British Columbia 2016)。

同博物館の設立の目的は、「ブリティッシュ・コロンビアにおける鉱山の歴史や資料を保存し、一般の人びとに鉱業について教育すること」(Britannia Mine Museum 2016d: About Us: The Museum, para. 1) であり、これまで学生をはじめ、あらゆる年代を対象にした展示やイベント、教育活動を展開してきた。鉱業関連施設を活かした展示・運営を行い、ブリティッシュ・コロンビアのみならず世界各地から多くの人たちが訪れている。

っている (Britannia Mine Museum 2016c より)。

³ 2005 年から 2007 年にかけて大規模な改修工事が行われた (Britannia Mine Museum 2014; Mining Association of British Columbia 2016)。

この博物館の目玉といえるコーナーは、実際のトロッコに乗って坑内に入る「アンダーグラウンド・ツアー」である。およそ45分間のツアーで、案内役のスタッフがブリタニア鉱山操業時の坑内労働や選鉱について、ユーモアを交えて説明する。そのほか、常設の展示コーナーでは、坑内で使用されていた機械や鉱山町での生活を映した写真や動画、環境改善への取り組みに関する資料など、多くの資料が展示されている（詳しくは「2. 巡検内容」に記載）。



写真3 ブリタニア鉱山ミュージアム

右の建物は国定史跡の第3選鉱場（Mill No. 3）
（Britannia Mine Museum 2016e より転載）

また、同博物館は、ホームページをはじめとするインターネット上の展示やアーカイブにも力を入れており、博物館では展示できなかった文書資料等を豊富に掲載している。さらに、学校関係者向けの資料として、予習・復習用の教材（プリント等）を掲載している。

上記のような活動が認められ、同博物館は、これまで多くの賞を受賞してきた。近年では、「Mining and Sustainability Award」（2012年）をはじめ、鉱業と持続的発展可能性に関する展示や教育活動が評価されている⁴。

この博物館は非営利団体であることから、運営維持費はギフトショップの売り上げ、入場料、寄付ならびに会員登録費によって運営されている。入館時の料金表やパンフレット等に「入館料やグッズの売り上げがブリタニアの歴史を保存することになります」と記載されていた。



図2 ブリタニア鉱山ミュージアム構内図
（Britannia Mine Museum 2016f より転載）

⁴ このほかの賞については、Britannia Mine Museum (2016f)を参照のこと。

2. 巡検内容

(1) 導入部分の展示物

入館した一行は、アンダーグラウンド・ツアーに向かう途中でさまざまな展示を閲覧した。まず、ビジター・センター（Beaty-Lundin Visitor Centre、図2 番号④）の中にある小さなシアターで、ブリタニア鉱山と博物館の紹介映像を観覧した。映像の内容は、鉱山労働者に扮した男性が進行役として登場し、ブリタニア鉱山の A to Z（歴史や働き方、生活など）を簡潔に紹介し、入館者の関心を高める内容であった。訪れていた子どもたちも興味津々に観覧していた。

つぎに、同じくビジター・センター内に展示されていたオブジェ（鉱山との関連は不明）や鉱石を閲覧したのち、ブリタニア鉱山の歴史がわかる展示コーナーにむかった。なかでも目を引いたのは、会社関係者のライフヒストリーを紹介したディスプレイである。「Exploration: 開拓」、「Building the Corporation: 会社設立」、「Technical Contribution: 技術」、「Supporting Contribution: 組織的サポート」の各分野で貢献した人びとの来歴を紹介しており、タッチパネル形式で自由に閲覧することができた（写真4、5）。



写真4 掲載者一覧（筆者撮影）

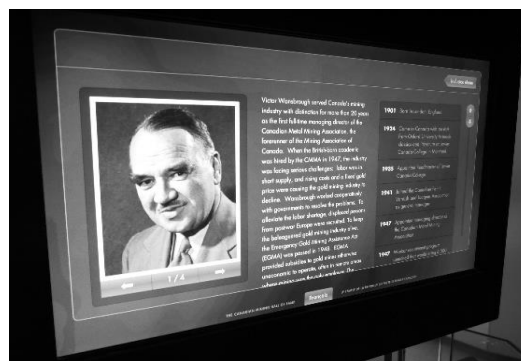


写真5 来歴の詳細（筆者撮影）

しばらくこれらの豊富な展示物を閲覧していたかったが、アンダーグラウンド・ツアーの時間が近づいていたため、一行はツアーの出発地である繰込み場（トロッコ乗車場）に向かった。途中、鉱員たちが使用していたロッカールームを模した展示があり（図2 番号⑧、写真6）、次第に入坑が近づいていることを予期させた。



写真6 ロッカー（筆者撮影）



写真7 入坑前のアナウンス（筆者撮影）

(2) アンダーグラウンド・ツアー

線込み場(図2番号⑳)に到着すると、子どもたちをはじめ、多くの来館者が入坑を心待ちにしていた。ツアー開始時刻になると、若い女性スタッフが案内役として登場し、参加者にヘルメットを装着させ、諸注意をアナウンスした(写真7)。そして、やや狭いトロッコに乗車して、ゆっくりと入坑した(写真8)。



写真8 トロッコに乗車し入坑
(筆者撮影)



写真9 ダイナマイトの説明
(筆者撮影)

ツアーは終始、スタッフが参加者に質問を投げかけ、子どもたちを中心に参加者が積極的に回答する形で進行した。まず、坑内を2~30m進んだところでストップして、発破で使用されていたダイナマイトの説明があった(写真9)。その後、さらに進んだところでトロッコから全員降りて、オーガー(穿孔機)の説明を受けた。スタッフの説明によれば、操業当時、坑内は暗く寒い場所で、硬い岩石に穴をあけるのは大変だったが、オーガーの導入をはじめ、坑内の機械化によって条件が改善されていった。しかし、初期の機械は重く、騒音もはげしかったため、その後も改良されていったという。実際に、スタッフがオーガーを動かして穿孔を実演し、大きな音が鳴り響いた(写真10)。



写真10 オーガー実演
(筆者撮影)



写真11 子どもたちによる手積み実演
(筆者撮影)

つぎに、採掘現場に移動し、採掘と積込み方法について説明を受けた。まず、参加していた子どもたち2人に手積みの実演をしてもらい、その間に女性スタッフが手積み時代か

ら機械化までの採掘現場について説明した（写真 11、子どもたちは最後まで健気に、黙々と実演した）。スタッフがロッカーショベルを動かす実演をして、手積み時代から大きく効率化が図られたことを説明した。

採掘現場を離れ、つぎに照明に関する説明があった。ツアー時の坑内は照明がついており、十分に明るかったが、スタッフの合図で照明が落とされると暗闇に包まれた。スタッフがろうソクをつけ、開鉱当初（1904 年頃）の坑内状況を再現した。当時はこのわずかな明かりで厳しい労働をしていたが、その後、カーバイトランプ、キャップランプへと進化し、坑内の照明条件も改善されていったという。

その後、坑外に出て、スタッフが緊急時のベルを実際に鳴らし、参加者たちは事故等が起きた際の緊迫した雰囲気を感じた。最後に、ブリタニア鉱山ならびに博物館の象徴的な建物である第 3 選鉱場（Mill No.3、図 2 番号④、写真 3 参照）に移動し、斜面の傾斜を利用した選鉱方法に関する説明を受けた（写真 12）。ここでは、スタッフが浮遊選鉱の仕組みを理解させるため、実際に小容器で泡を立てて、鉱石の粒子（ore particles）が泡に付着する様子を見せた（写真 13）。この方法は、世界的に普及している選鉱方法であり、ブリタニア鉱山では初期から用いられたという。選鉱に関する説明が終了し、ツアーの全行程が終了した。



写真 12 選鉱場（筆者撮影）



写真 13 浮遊選鉱実演（筆者撮影）

（3）ブリタニア A to Z 展示 (Britannia A-Z)

ツアー終了後、屋外に展示されていた人車を見学したのち、ブリタニア A to Z 展示 (A-Z、図 2 番号②) にむかった。ここでは、ブリタニアに関する 26 項目 (A から Z) をパネル形式で説明している。項目の詳細は表 1 の通りである。

展示されている内容は、労働から技術、保安、施設など多岐にわたる。特に、ブリタニア・コミュニティに関する項目が最も多く (C、M、Q、R など)、全体を通してみると、ブリタニア・コミュニティの特徴とその変容過程がわかる。また、ブリタニア・ビーチで最も有名なイベント「Q : (Copper) Queens (銅の王女)」のコーナーには、当時の映像や写真、Copper Queen が座る椅子やブリタニア産の銅を使用して作られた王冠が設置されていた (写真 14)。



写真 14 Copper Queen (筆者撮影)



写真 15 Japanese Workers (筆者撮影)

いずれのコーナーも非常に興味深かったが、なかでも興味を引いたのは、やはり「J: Japanese Workers (日本人労働者)」のコーナーである(写真 15)⁵。パネルの冒頭には、以下のように記されていた。

1942 年、日本人居住者の収容は、第二次世界大戦中のブリティッシュ・コロンビアにおける反省すべき差別の物語である。日本人は、仕事と居住区によって隔離されながらも、開鉱当初からここブリタニアでずっと働いてきたのである。

以上のように、このブリタニア A to Z 展示には、豊富な資料をもとに、ブリタニアの輝かしい側面から、負の側面までが紹介されていた。なお、各項目のより詳細な説明は、同博物館ホームページに掲載されている。

最後に、われわれはグッズ売り場に向かった(図 2 番号⑦)。銅を使用したグッズを中心に、ブリタニアに関する雑貨や書籍など、幅広い品揃えだった。特に、ヤマの男たちがかぶるヘルメットや「Copper Queen」の王冠を模したおもちゃが目についた。ここでの売り上げは、入館料同様に、同博物館の運営に役立てられるという。

⁵ なお、別日に訪問した Gulf of Georgia Cannery National Historic Site (ジョージア湾缶詰工場博物館、ブリティッシュ・コロンビア州、リッチモンド)にも、日本人労働者に関する展示があった。缶詰工場での単純労働に従事していた日本人労働者の様子がわかり、なかには、子どもを背負いながら働く日本人女性の写真が掲示されていた。ブリタニア鉱山と同じく、20 世紀初頭のカナダにおける日本人労働者や多国籍性について考えることができる資料館である。

表 1 ブリタニア A to Z 展示内容

		概要
A	Acid Rock Drainage	鉱害（水質汚染）
B	Bunkhouses	独身者、単身赴任者用の寮
C	Company Town	企業城下町、ブリタニア・ビーチ
D	Disasters	ブリタニアで発生した地すべり、大火、洪水
E	Ethnic Diversity	50 以上の国々から来た労働者とその家族
F	Froth Flotation	早期に導入された浮遊選鉱
G	Gold	主要には銅山だが、金山でもあった
H	Highway	1958 年に開通した高速道路
I	Incline Railway	2 つの鉱山町を繋ぐ人車（5 km）
J	Japanese Workers	日本人労働者に対する人種差別
K	Kilowatts	自家発電用の水力発電施設
L	Launders	水質汚染を防ぐための樋
M	Mount Sheer	渓谷にあった鉱山町
N	National Historic Site	選鉱施設として知られる第 3 選鉱場
O	Ore	産出された鉱石（銅、亜鉛、鉛、カドミウム、金、銀）
P	Pandemic	第一次世界大戦後に流行したスペイン風邪
Q	(Copper) Queens	ブリタニア・ビーチで開かれていたミスコン
R	Recreation	余暇生活（スポーツ、文化活動等）
S	Safety	保安に対する取り組み
T	Technology	先進的な技術の開発と導入
U	Union	よりよい労働条件、賃金、安全のために闘った組合
V	Vastness	210 kmにおよぶ坑道、高低差 1750m
W	Water	水力発電、港町、洪水、水質汚染
X	X-Files	映画、ドキュメンタリーのロケ地として
Y	Youth	多数いた“ヤマの子どもたち”
Z	Zinc	重要な鉱石だった亜鉛

出典：Britannia A-Z 掲示物ならびに Britannia Mine Museum 2016c より作成

3. ブリタニア鉱山ミュージアムからみるアーカイブの意義と活用方法

ブリタニア鉱山ミュージアムの巡検を通して、鉱業アーカイブの意義と効果的な方法を考えさせられた。以下では本稿のまとめとして、鉱業アーカイブの意義と資料活用方法について若干の考察を行う。

(1) ブリタニア鉱山アーカイブの意義

ブリタニア鉱山アーカイブの最大の意義は、鉱山コミュニティの特徴とその変容過程の解明に貢献する資料を顕在化させ、研究を推進している点である。ブリタニア鉱山の

最大の特徴は、社会的・地理的に孤立し完結した、典型的な鉱山コミュニティを形成していたことである。博物館の各種展示にもあったように、ブリタニアの人びとは、「強いコミュニティ精神」をもって労働生活と余暇生活を過ごし、独自の文化を形成してきた。しかし、1950年代の交通網の整備や1960年代の新会社への経営権移行、鉱業不況といった外的な諸力によって、その精神は解体された。このようにブリタニア鉱山は、コミュニティ変容に関する社会学的研究を推進する貴重な素材を有しており、今後も各種資料のアーカイビングが望まれる。

そのほか、ブリタニア鉱山には、鉱山ならではの特徴である住民の多様性（ここでは主に多国籍性）や鉱業と環境保全に関する事項もみられた。前者は、移住者に対する隔離・差別問題を含み、後者は、産業・企業の社会的責任に関する問題である。いずれも、今日においてもなお重要なテーマであり、今後さらなる研究が求められる。

（2）アーカイビングの効果的な方法と国内博物館への示唆

以上のように、ブリタニア鉱山は、社会学の研究において貴重な事例であり、豊富な資料を有している。ブリタニア鉱山ミュージアムでは、これらの貴重な資料を非常に効果的な方法でアーカイブしていた。巡検を通して印象に残った2点を以下に記す。

第1に、入館者の主体的な参加を促し、資料的価値の高さを深く理解させていた点である。目玉コーナーであるアンダーグラウンド・ツアーでは、現存の坑道、機械、建物を活用して、入館者に鉱山労働の実態を体験させていた。また、スタッフが質問を通して入館者の主体的な参加を促し、理解を深めていた。さらに、受付やグッズ売り場などにみられた、「入館料やグッズの売上げがブリタニアの歴史を保存することになります」という非営利組織ならではの宣伝も、入館者の参加意識を醸成しているようにみえた。こうした入館者の主体的な参加意識と深い理解は、入館者の再訪または新規開拓へとつながり、ブリタニア鉱山資料の保存と活用への期待を高めることになる。

第2に、運営スタッフの世代交代、若返り化である。アンダーグラウンド・ツアーで案内を務めていたのは、おそらく閉山時はまだ生まれていなかったであろう若年のスタッフであった。しかし、作業時の坑内条件や労働について流暢に説明しており、違和感を覚えることもなかった。むしろ、ツアー全体に活気があり、参加者全員で学んでいる感覚だった。同博物館は、閉山から40年以上が経つなかで、鉱山労働者OBによる案内に固執するのではなく、若年世代に担当させ、見事成功を収めているといえる。

そして、巡検後の情報収集でわかったことだが、同博物館があらゆる年代を対象に教育活動を展開していることも特徴の1つといえよう。前述のとおり、ブリタニア鉱山には産業、労働、文化、環境といったあらゆるテーマに関する資料が存在している。ブリタニア鉱山ミュージアムでは、それらを教育資料として位置づけ、児童・生徒向けのツアーだけでなく、企業関係者といった大人を対象とした活動にも力を入れている。

以上のようなブリタニア鉱山ミュージアムの特徴は、日本国内の鉱山関連博物館、とりわけ、ブリタニア鉱山と同時代に操業していた炭鉱をテーマにした博物館に、多くの示唆を与えている。国内の炭鉱博物館では、学芸員によるさまざまな試みや工夫がみられるが、ブリタニア鉱山ミュージアムにみられた「活気」は、残念ながらみられない。その要因は、アンダーグラウンド・ツアーのような印象的なコーナーがないこともさることながら、各

博物館が有する資料の価値が広く認識されず、アーカイビングの意義が見いだしにくい状況にあることが最大の要因だろう。ブリタニア鉱山ミュージアムのように、資料の研究的・教育的価値が見いだされ、広く活用され、国内産炭地の博物館が活気づくことを期待したい。

参考文献

- Britannia Mine Museum, 2014, “Britannia Mine Museum 2014 Press Kit”, National Historic Site Britannia Mine Museum, British Columbia, (2017 年 2 月 6 日取得, <http://www.britanniaminemuseum.ca/assets/bmm-2014-press-kit-new.pdf>).
- , 2016a, “History of The Britannia Mine”, National Historic Site Britannia Mine Museum, British Columbia, (2017 年 1 月 3 日取得, <http://www.britanniaminemuseum.ca/history-1>).
- , 2016b, “‘The Britannia Story’ Find the all-capitalized words in the word search puzzle”, National Historic Site Britannia Mine Museum, British Columbia, (2017 年 1 月 3 日取得, http://www.britanniaminemuseum.ca/assets/edu-resources/The_Britannia_Story_and_word_search.pdf).
- , 2016c, “THE A-Z OF BRITANNIA MINES”, National Historic Site Britannia Mine Museum, British Columbia, (2017 年 1 月 3 日取得, <http://www.britanniaminemuseum.ca/assets/a-to-z-britannia-low-res.pdf>).
- , 2016d, “About Us: The Museum”, National Historic Site Britannia Mine Museum, British Columbia, (2017 年 1 月 3 日取得, <http://www.britanniaminemuseum.ca/about-us>).
- , 2016e, “National Historic Site Britannia Mine Museum, British Columbia”, National Historic Site Britannia Mine Museum, British Columbia, (2017 年 1 月 3 日取得, <http://www.britanniaminemuseum.ca/index.html>).
- , 2016f, “Awards: For the Museum”, National Historic Site Britannia Mine Museum, British Columbia, (2017 年 1 月 3 日取得, <http://www.britanniaminemuseum.ca/awards>).
- , 2016g, 「ブリタニア鉱山ミュージアム案内・パンフレット」(日本語版).
- Bruce Ramsey, [1964] 2014, *Britannia: The Story of a Mine*, 3rd ed., Vancouver: Trafford Publishing.
- Mining Association of British Columbia, 2016, “Britannia Mine Museum”, Mining Association of British Columbia (2017 年 2 月 6 日取得, <http://www.mining.bc.ca/company-organization/affiliation/britannia-mine-museum>).